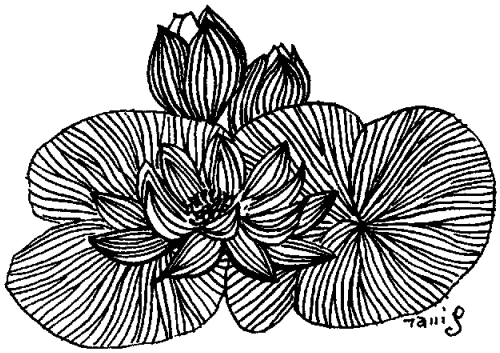

自然保護運動のひとつの前進

井手貢夫

自然保護運動は、今世紀初頭、急激に発達する工業や都市化のために、貴重な動植物や、美しい自然景観がそこなわれることをおそれた有識者や、学者たちの手によってはじめられたものである。しかし、工業と都市化のその後の拡大は、大規模な公害問題にまで発展して、自然景観や動植物の保護は、単に自然景観や動植物そのものの保護の問題ではなくて、そうした自然物の生存がおびやかされるということは、じつは人間そのものの生活の安全がおびやかされることであるということが、ようやく人々の認識するところとなった。

こうして自然保護ということが、じつは人間本来の生存にかかわる問題として、とりあげられるようになったことは、自然保護運動という面では喜ぶべきこととともいえるが、しかし一方では、事態の深刻さを裏書きするともいわねばならないのである。

内閣総理大臣諮問第九号「経済社会の発展に伴う国民生活水準の変化に対応する観光のあり方、およびそれを達成するための基本的方策」に対する答申第一号として、去る四月十七日に観光政策審議会が提出した「国民生活における観光の本質とその将来像」という答申においても、観光という社会現象を、人間が生活環境を変化させることによって、失われたバランスを回復しようとする反応としてとらえ、そういう意味での観光における自然保護の重要性を説いていることは、前述した意味からいって非常に妥当なことといわねばならない。

観光と自然保護との問題は、ここまで掘り下げてみてはじめてその目標をひとつにすることができる。もちろん、具体的な問題については面倒な多くの解決が検討されねばならない。しかしこのような認識が観光政策審議会において表面にあらわれたことは、わが国の自然保護運動において、なんといってもひとつの重大な前進ということができよう。事実、自然保護ということはそれほど深刻な問題になっているのである。

（理事長）